

# 学びの中に答えがある

センター協力研究員（1999年度）（杉並区立東田中学校教諭） 福田 博 行

## 1. 多様性に意味がある

いじめ問題の研究会に、第一回目の講師として招かれてから、ずっと参加してきました。

私の実践報告「いじめない自分づくり」（福田博行著、学陽書房）が二年前に出版され、予想に反して第1刷で打ち切られました。社会・学校が、いじめ、いじめと騒いでいる割には、実際は、いじめ問題は教育関係者にとって自分自身の問題として意識されていないし、危機感もあまりない事に、がっかりしたものでした。

そんな時に、研究センターから声がかかった事に正直驚きました。私の知る限りでは、この問題に組織的に、真剣に、継続的に、かつ具体的に取り組んでいるのはとても少なく、新潟県の教育委員会ぐらいでしょうか。個々の実践もまれだと言えます。東京都の教育委員会では、教師向けのパンフレットを、生徒たちには子供110番のカードをくばっておしまいです。ですから、なんで東大が、と妙に感心した事を覚えています。

私は今、デス・エデュケーションの研究会に参加しているのですが、その会と同様に、東大での会は参加者の多様性がとても興味深く思えました。教師だけの研究会では、新しい切り口や、新鮮な発想や、大胆な取り組みはあまり出てきませんので、私は興味を感じません。同じ土俵の、しかも狭い社会の中では、どうしても馴れ合ったりグチばかりになるケースが多いからです。現状を嘆くのではなく、何ができるのかが問われなければならないのにはです。

そういう意味では、小・中・高・大の教員、教育委員会関係者、管理職、医師、カウンセラーなど異業種の違った立場からの発言は、とても面白く、結局一度も欠席することなく参加してしまいました。

## 2. いくつかの課題

ただ、せっかくの貴重な会なのですが、残念な点もありました。一つはメンバーに現場の教育関係者が何人もいたのですが、多忙なせいとか、あまり参加されなかった事です。

いじめ問題に関しては、会そのものがいかに内容が充実していようとも、その中身が伝わらなくては、その価

値は半減します。現場に伝わり、そして取り組み、フィードバックされてこそ、この会の目的の一つが達成されるのではないのか、ということです。

もう一つは、市民の参加がなかった事です。研究センターの主旨からすれば、やむえないかとも思いますが、この研究会は、たとえ参加者の立場が違っても、大きく括れば同業者の集まりです。どうしても、発想が限定されてしまうのではないのでしょうか。現代の教育問題は、学校独自でどうにかなる問題ではありません。どれだけ外部の世界とつながれるのか、支援を求められるかがポイントになってきている時代です。そういう意味では、教育問題に取り組んでいる市民運動には、非常にユニークな視点を持っている人がいます。そうした人達の参加が今後はあってもいいのかな、とも思いました。また違った角度からのアプローチが可能になるでしょう。

## 3. 今泉実践の意味するもの

講師の中で一番感銘したのが今泉さんでした。以前からの知り合いで、何度も話を聞き、意見の交換もしてきましたが、でも今回改めて新鮮な思いを持ちました。それは、授業の大切さということです。今泉流に言えば「豊かな学び」ということになるのでしょうか。私たち教師が授業に大切さと言う時、それは誰にとっての大切さなのか、ということ考えた事があったかなと思うのです。知らないうちに、教師にとっての大切さになってしまっていないのでしょうか。チャイムを守り、私語もなく静かに話を聞き、忘れ物することなく、宿題はきちんとやってくる生徒たちを望んではいないのでしょうか。いい子でいる事を有形無形で強制していないのでしょうか。

そうした視点の中には、生徒の置かれた立場と思いが欠落してしまう事を、自分自身を振りかえりながら考えたいと思います。

いじめ問題として考えれば、学校は中立の立場ではなく、気付かないうちに、自らいじめの土壌を生み出してはいないかという事を自省してみる必要があります。授業の内容が分からず、毎日何時間も黙って座っている事を強制される生徒の辛さとストレス。テストのたびに自信を失い、自己肯定感を持たずにコンプレックスの固ま

りとなり苦しむ生徒たち。

私たちは、生徒たちのそんな思いをどれだけ汲み取る努力をしているのか。今泉実践の中で語られた、「豊かな学び」が突きつけている大きな課題だと言えます。

学校が教育ではなく、豊かな学びの場となり、授業が分かる充実感、新しい発見の喜び、認められる事での自尊感情、知識が単に暗記ではなく感動として獲得できる。しかもそれが、個人としてだけでなく集団として、クラスのつながりの中でつかみとれる。こうした学習活動の場が保証されていれば、いじめは生まれようがない、少なくとも深刻ないじめは。ここに今泉実践の本質があるような気がします。

いじめを私たちが考える時、それを指導する問題とし

てではなく、学習の対象として捉えたり、あるいは学びそのものの問題として見直す事を求められているのではないかと思います。

いじめ問題解決のための手探りの取り組みはこれからが本番でしょう。現状が改善されない限り、これからもたくさんの生徒たちの自死が起こる事でしょう。残念ながらそれが現実です。でも、めげる事なく全国で研究センターのような試みがなされる事を強く望んでいます。

最後に、この一年間とても充実した時間を過ごす事ができました。教育研究センタースタッフの皆様に感謝すると共に、こうした活動を今後も継続して取り組んでいかれる事を願うものです。